

### 中学生の部 優秀賞



#### 池江選手から学ぶ 前向きな心

中央台南中3年 鈴木 ゆわ

池江選手が昨年一月に白血病と診断された。東京オリンピックに向けてメッセージを発信した。池江選手が話す一つの言葉は私の心に響き、勇気と希望を与えてくれた。

池江選手は昨年一月に白血病と診断された。東京オリンピックに向けてメッセージを発信した。池江選手が話す一つの言葉は私の心に響き、勇気と希望を与えてくれた。

池江選手を襲った白血病は血液のがんで、かつて「不治の病」とされた病気であったが、医療が進んだ今では治る可能性の高い病気になりつつある。辛い治療を乗り越えることで元の生活に戻れる人も多い。池江選手は闘病中から様々なメッセージや姿を発信してくれていて、骨髄移植中であっても体調の良い時に今の状況を教えてくれていた。抗がん剤の副作用で髪が抜けました時、ウイッグを外し坊主姿を見せてくれた。

「死者踏み越えて脱出」八月十一日付けの新聞に載せられていたこの見出しが私の目に止まった。今から七十五年前の一九四五年四月十二日、郡山市のある工場に米軍爆撃機B29が無数の爆弾を落とす。そのときの被害はともかく、工場だけで約三百五十人が犠牲になった。当時十五歳の工場の学校生だった橋元さんは、防空壕の中に避難していた。外に出ようとする、辺りはとても悲惨な光景が広がっていて、死者を踏み越えて出ていく状況であったという。機銃掃射するB29を恐れながらも無我夢中で阿武隈川に飛び込み、泳いで逃げて助かった。



#### あの日を忘れない

郡山三中2年 小林 里緒

「死者踏み越えて脱出」八月十一日付けの新聞に載せられていたこの見出しが私の目に止まった。今から七十五年前の一九四五年四月十二日、郡山市のある工場に米軍爆撃機B29が無数の爆弾を落とす。そのときの被害はともかく、工場だけで約三百五十人が犠牲になった。当時十五歳の工場の学校生だった橋元さんは、防空壕の中に避難していた。外に出ようとする、辺りはとても悲惨な光景が広がっていて、死者を踏み越えて出ていく状況であったという。機銃掃射するB29を恐れながらも無我夢中で阿武隈川に飛び込み、泳いで逃げて助かった。

「死者踏み越えて脱出」八月十一日付けの新聞に載せられていたこの見出しが私の目に止まった。今から七十五年前の一九四五年四月十二日、郡山市のある工場に米軍爆撃機B29が無数の爆弾を落とす。そのときの被害はともかく、工場だけで約三百五十人が犠牲になった。当時十五歳の工場の学校生だった橋元さんは、防空壕の中に避難していた。外に出ようとする、辺りはとても悲惨な光景が広がっていて、死者を踏み越えて出ていく状況であったという。機銃掃射するB29を恐れながらも無我夢中で阿武隈川に飛び込み、泳いで逃げて助かった。

「死者踏み越えて脱出」八月十一日付けの新聞に載せられていたこの見出しが私の目に止まった。今から七十五年前の一九四五年四月十二日、郡山市のある工場に米軍爆撃機B29が無数の爆弾を落とす。そのときの被害はともかく、工場だけで約三百五十人が犠牲になった。当時十五歳の工場の学校生だった橋元さんは、防空壕の中に避難していた。外に出ようとする、辺りはとても悲惨な光景が広がっていて、死者を踏み越えて出ていく状況であったという。機銃掃射するB29を恐れながらも無我夢中で阿武隈川に飛び込み、泳いで逃げて助かった。



#### 希望を持って 生きていける社会に

信陵中1年 浜崎 凌

「安楽死」僕は、この記事を読むまで、この言葉を知らなかった。医師は、必ず患者の命を救って、死を思っていたが、こんな恐ろしい事でもできてしまう資格であることに驚いた。命の大切さを一番に理解しているはずの医師が、患者として向き合わず、SNSのやり取りだけで、まだ生きられるはずの大事な命を、いとも簡単に奪ってしまったなんて、とても残念で、胸が痛くなった。

僕は、毎日健康に過ごしているのに、死について考えたこともなかった。でも、世の中には、様々な病気で、いつも生と死について、想像もつかないほどの恐怖におびえながら生きていく人達がいる事に気がついた。だから、被害者の女性にも、「つらかったね。今までよく頑張ったね」という思い、「大事な命本当にそれで良かったの。」という思いが、入り混じってしまった。

「安楽死に賛成か反対か。」と考へ、色々調べてみると、日本の法律では安楽死は認められないが、個人の意見を尊重する海外では、認められていることがわかった。今まで、自分や人の命について、こんなに真剣に考えたことがなかったから、答えを出すのが、とても難しかった。家族にも相談してみると、全員同意意見で、少しほっとした。

僕は、このような問題は、医療の力だけでは解決できないと思う。人は一人では生きられない。だから、もっと、周りの人に助けを求められる環境や、病気で、きちんと社会とつながっている安心できる環境を作っていくことが、患者さんの苦しみに寄り添い、死を選ぶのではなく、命の大切さに気づいて、希望をもって生きていける社会にしたい。だから、お母さんが産んでくれた、かけがえのない命だから。

### 高校生の部 優秀賞



#### 少年法の記事を読んで

福島商高2年 高原 かえで

近年、日本では未成年者による悪質な犯罪が増えている。そんな中、自民党は少年法適用年齢を現行の二十歳未満を維持する案を事実上承認した。この案では、二十歳未満という年齢を引き下げることは無いが、十八歳から十九歳は逆送の範囲を広く厳罰化するといった内容も含まれている。これをふまえて、少年法を十八歳から適用にしたい方が多いのではと考えた。その理由として、自分自身が高校生という立場となり、十分な善悪の判断が可能である年齢である十八歳、十九歳の年齢の人間が善悪の区別がつかないとは、とうとうい考えられないから。また、少年法が適用されない年齢という立場を利用した悪質な犯罪も増加していることから少年法の適用年齢を引き下げるべきではと

考えた。どんな理由があろうと人を傷つけたら、不快な気持ちになるような事をしてはならない。少年法という十代の健全な育成のために非行のある少年を教育し、非行方向に導き保護する法。たしかに、非行のある少年はこれからの人生を正しく生きようと更生し生きていくことができるだろう。しかし、残された被害者、遺族はどうか。どこにもぶつけることができない怒りや悲しみを抱いたまま、この先を生きていかなければならない。

今回の記事の内容としては少年法の適用年齢を引き下げることはしないものの重大犯罪を起した十八歳から十九歳を例外的な取り扱いすることも内容として、少数のもの。この記事を読んで、少数か

た。昨年七月には退院後初となるプール練習で、水着姿まで見せてくれた。女の子であれば、坊主姿や、やせてしまった体は、できれば人目に触れたくないと思う。それができる池江選手に私は人としての強さと、復帰への強い決意を感じた。

無観客の国立競技場の広いフィールドの中央に一人立つ池江選手は、とても美しくかった。華美な演出もなかった一人であるにもかかわらず、彼女はキマキラと輝きを生きていた。ゆっくり語りかけられる言葉が心の中に届いてきた。彼女はいつも前向きであり、努力を怠らず、人への感謝を忘れず、自ら誰かの力になりたいという気持ちを強く持ち続けているからこそ、その思いが他の人の心に届くのではないだろうか。

今、高校受験に向け勉強に励んでいる。まだまだ自分に甘さがあると感じる。まずは目標をしっかりと定め、そこに向かって強い意志を持って、池江選手ほど強くはないが、少しでも近づける努力を始める力がわいてきた。



#### 農業人口の減少とロボット

福島商高2年 二階堂 伊織

農林水産省によると、二〇一五年に約一五〇万人いたとされる農業人口は、二〇三〇年には約半減となる約七五万人にまで減少すると予想されている。また、農業就業人口及び基礎的農業従事者の平均年齢は約六十七歳で、年齢構成比率における四九歳以下の割合はわずかに約一〇パーセントとなっている。

農業は重労働で、高齢者はもちろん、若者にとっても大変な作業が多い。私もこの夏休み、農家である祖父の手伝いをして大変さを強く実感した。まず毎日三〇度を越す炎天下の中で外に立っているというだけでも辛い。そして収穫する時はかきむくもも多く腰に負担がかかる。一日収穫をしないだ

けで作物はどんどん大きくなってしまい出荷できなくなってしまうこともあるため、農業に休みはなし。しかし数年前から祖父が疲れやすくなり、田植えの代行を頼んだり、畑の規模を縮小してしまっただけでなく、後継者がいない農家は増えている。私たちがスパーに行っても農家の人手不足を感じることが少ないだろう。でも実際はかなり深刻な問題だといえるのだ。

この収穫ロボットは高齢者の手助けになるだけでなく、若者が就労しやすい環境を整えるためにも大きな役割を果たすのではないかと考えている。キュウリ以外にも様々な野菜の収穫ロボット

あの日の出来事人々の記憶から薄れていくのではないかと不安に思った。

これからの世代の人々が「戦争」という悲惨な出来事を忘れないためにはこのようにすればよいのだろうか。私は、実際の戦争や空襲の映像を目にするのことが、悲しさを知らずとも、それがとても大切なことであると思う。

私は、この記事を読んで、郡山市の多くの人が犠牲となったことに戦争の悲惨さを感じた。そして、今から七十五年前の出来事でも誰かが忘れてはならないことだと思っただけで捉えていた。しかし、中学一年生になってから夏休みに東京都にある歴史博物館へ行くと、実際の映像や展示されていた軍服などを見た。軍服は銃で撃たれた穴が何箇所もあり、戦争や空襲の悲惨さを改めて感じるようになった。

自分か、このような立場になったら、家族に迷惑をかけたくないから、安楽死を希望する。でも、家族が安楽死を希望したら、絶対に反対する。という答えがあった。きっと、この女性も、僕の家族と同じように、家族や社会に申し訳ないと思っ、安楽死を選んでいただろう。その心の奥底に、元の生活に戻りたい、もっと家族と一緒にいたい、もっと生きたいと願っていたかもしれない。

僕は、このような問題は、医療の力だけでは解決できないと思う。人は一人では生きられない。だから、もっと、周りの人に助けを求められる環境や、病気で、きちんと社会とつながっている安心できる環境を作っていくことが、患者さんの苦しみに寄り添い、死を選ぶのではなく、命の大切さに気づいて、希望をもって生きていける社会にしたい。だから、お母さんが産んでくれた、かけがえのない命だから。



#### ダイバーシティとこれからの社会

学法石川高1年 緑川 知紗

お茶の水女子大学のトランスジェンダー学生受け入れなど、昨今の大学のダイバーシティに対する活動が大きな広がりを見せている。黒人差別問題や障害者思想など、現代社会では様々な問題が注目されている。中でも、多様化を目指す運動はこれまでよりも活発化し、今まさに国際的な変革を迎えている。私はその中でも特に、LGBTsについて深い関心を持っている。LGBTsとは、LGBTsとは、性的少数者(主に同性愛者や両性愛者、心と体の性が一致しない人)に加え、無性愛者や自分の性的指向と性自認に確信が持てない人)を指し、多様な性のあり方を示す言葉である。

私が見つけたこの記事にも、今がそんな改革の最中であることを証明するようなLGBTsへの取り組みが綴られていた。福島大学

において、オールジェンダーのトイレが設置されたのだ。二〇一八年の外部アンケートでは、職場や外のトイレ利用に不満を抱えているトランスジェンダーが実に六十五パーセントにのぼった。その多くが男女別のトイレ利用だとどちらを利用すればよいか分からず、周りの利用者の目が気になると回答した。これを受けて、福島大学はオールジェンダーのトイレの設置を複数台にしている。費用のかかる取り組みだが、当事者の声を拾い上げていく、利用者寄りな設備改善だと感じます。福島大学では更に、性別情報取扱に関するガイドラインを定め、性差別をなくして、性自認の取扱いが適切になることを目指している。性自認の取扱いが適切になることを目指している。性自認の取扱いが適切になることを目指している。

現在、総人口のうち、二〇人に一人がLGBTsであるとも言われている。多くの人間にとって、セクシュアリティとアイデンティティは密接に関係しているもの。誰かが我慢して解消する問題ではない。多くの人の理解と環境を変えようとする姿勢が、社会を変えていくこととなるのだ。将来、私のような社会問題の支援をする大人になりたいと思う。その日に向けて、これからも新聞で社会の正確な現状を学び、未来の社会の構成員として、積極的に向き合っていきたい。

第11回みんなの新聞感想文コンクール作品紹介